

詩よ
歌よ
さようなら
富岡多恵子

冬樹社



詩よ
歌よ、
さようなら
富岡多恵子

冬樹社

詩よ歌よ、さようなら

昭和五十三年十一月九日第一刷発行

定価 九八〇円

著者 富岡多恵子

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町三三七六

電話東京二六四一〇三四六

印刷所 誠之印刷株式会社

製本所 株式会社美成社

詩よ歌よ、さようなら 目次

1

11	日本語との出会い
17	ヒトのことば
21	詩のことば
24	政治のことば
27	ことばとの距離
34	ことばの情緒
37	ことばの土地
43	「文章読本」について
47	プロの文章
51	文字を考える
55	発音辞典について
60	芸術という不渡手形

2

81 人間中勘助

88 小野十三郎の歌

96 小説家野坂昭如氏の小説

103 森茉莉さんの「或る時」

111 男の友だちのように

115 田辺聖子さんの「貞女の日記」

3

125 音と音楽

131 日本のウタへの愛

136 ニホンの歌謡曲

140 歌謡曲へ

147 歌謡曲への裏切り

161	女の子の読書
168	忘れられない本
172	ほんだな
178	「音楽の根源にあるもの」
181	詩と詩でないもの
185	詩人と小説家
188	詩人の出所 ^{でしよ}
191	戦後詩への愛着?
193	或るインタビュー記事
197	ヘンコツ
202	ムツカシイひと
207	ゲンカイなひと
212	ケントク

215

やさしいボタン

221

「思想」の安売り

227

あとがき

初出誌紙一覧

装幀
三嶋典東

詩よ歌よ、さようなら

日本語との出会い

日本語との出会いなんていうと、外国人の感想みたいで気がひけるが、わたしはまちがいなく日本人である。その日本人が最初に日本語に出会ったのは、劣等生ではあったが英文科の学生になった時である。出来の悪いズボラな学生は英語から日本語に翻訳された詩や小説を読む必要があった。高校生の時にも翻訳の小説は読んでいたが、その元の英語はのぞいてみたこともないところへ、たんにストーリーのおもしろさを追って読んでいただけなので、翻訳の日本語をあまり気にとめなかった。

ところが英文科の学生となってからは、翻訳を手つとり早い虎の巻として読むことが多くなったから、いくら怠け者の学生でも英語とてらし合わせることもでてくる。と同時に、多少は英文を読むチャンスがふえてくると、逆に翻訳の日本人の日本語らしくないところが気にかかり出した。日本文なのに、彼の、彼女の、といちいち書か

れている場合などは気にかかつて仕方がない。日本文なのに、何度読んでもよく意味がのみにくくない場合や、句読点の打ち方が勝手気儘でいい加減な時なども気にかかり出す。また文章に、まったくリズムがなく、調子はずれの歌を聴くように、イライラさせられることもある。もっと、日本語の文章はわかりやすく、日本人にとって感じのいい語感をもつ言葉であるはずだと思うようになった。英文科へ入ったおかげで英語に会おう前に日本語に会ったのである。

たとえば、「ベティーは怒って出ていった。そして彼女は大声をあげた。」というような翻訳日本文に出会っていると、そしてというのは日本語じゃない、とわたしは即座に思ったのである。日本語にこのようなそしてというのがあるのだろうかと疑うようになった。

そのころ読んだT・S・エリオットの「荒地」なる詩は、『荒地とその他の詩』という詩集に入っていたが、これも日本の詩人が「ナニナニとその他の詩」という題でつくった詩集に出会っていると、これは日本語じゃないと思うのである。——and other poems” というところは日本語の詩集の題の感覚ではないし、日本語では不要である。他にも、たとえば「海あるいは記憶」というふうない方が英語の詩集にはよくある。

この場合 *po.* を訳したつもり「あるいは」は日本語ではない。だいたい「海あるいは記憶」ふうな文脈は日本語でないと思うから、こういう外国語の詩の題を、得々と真似して、ソシテ、アルイハ、トソノ他ノ詩という流儀の日本語を書く詩人や小説家を、その時から信用しないことにした。

勿論、わたしがこれは日本語じゃないとえらそうに断定したのは、なんの学問的根拠もない。そのころ詩を書きはじめてばかりの、若いナマイキな人間の感覚的な独断であった。しかしそのころから、自分の独断を裏づけるために、日本語らしさとはどういうものかを、自分なりに考え、詩を書く上で実行しなければならなくなった。

次に日本語に出会ったのは、アメリカに十カ月間住んだ時である。外国語の中では、たんに国語だったものを日本語として意識せざるを得ないからである。外国語の中にいて、その外国語社会への同化に対してかなり抵抗をもっている、日本語はやはり弱くなり、放っておくと失われていく。ひとにもよるだろうが、わたしはその恐怖心を強くもち、また実際、日本語で手紙を書くのも苦痛になった。といっても、わたしは、外国に住む日本人にすれば、いやらしいくらいにその言葉の感覚になじもうとしない人間であった。それなのに、日本語の勘は確実に失われた。わたしは、アメリ

力からなにかを学び、なにかを得るよろこびよりも、日本語を失う恐怖を強く感じた。だから、それほどの日本語ならその言葉のこともっと深く考えねばならなくなった。と同時に、その時のわたしの日本語が強固なものではないから失う恐怖が強いのであるとは感じていた。このことは、たんに言葉の問題でなく、はじめて触れたナマの異質の文化との、個人的な衝突事件としても考えなければならなかった。

さらにまだ、日本語に出会う機会があった。わたしは六年前から小説を書き出した。その前には、詩も雑文も書いていたが、小説の散文はまたちがうものである。もともとわたしは、小学校から大学までの間で、日本語で正確な文章をつづる訓練を受けたことはない。これはわたしにかぎらず、戦後の学校教育を受けた者はそうである（戦前のことは知らない）。だから、文章を書くのを仕事にしていく人間として、当然日本語に及ばずながら対面して、日本語の科学を独習する他なかった。

この種の独習は、詩を書き出す時にすではじまっていたといってもいいが、いつも思ったのは、学者による専門的な（しかし一般の人間にはあまりにもコマギレに見える専門化）言語論や文法論のごときものがあったも、正確な現代日本語を書くための教科書がないことだった。小説家の書いた文章読本のようなものは、義務教育を受